

不確かなものから
生まれる
小さな気づき

高須 拓

small happiness
in mist

Hiraku
Takasu

1. 私の目 (Background / Intro)



これは、「もし、私が裸眼で1日の生活を送ることができたら、
どういう風景が目に映るのか」を実験した3分の映像である。
朝目覚めて、日中に外出して、夜に帰宅する。このごく普通の
日常の生活を、ビデオカメラを通して記録する。この時、ピン
ボケ具合は、実際に私が裸眼で見た時と同程度の見え方を再現
することを心がけた。
物心がついた時から、視力が低かった私は、必要に迫られて、
小学5年生の頃に眼鏡をかけることになり、高校生からコンタ
クトを装着し、視力を矯正することになった。たしかに、写真
大会で神社に行ってもぼやけた神社しか描けないし、黒板の文
字が見えないし、何より外を歩くことすら危ないと感じたため、
はっきりと見えるようにすることはしょうがないことだった。
でもその当時から、ぼやけているからこそその良さもあるなとずっ
と思っていた。細部が認識できなくて、輪郭線と、光と、色が
強調された風景。いつもの何気ない日常生活に些細な幸せがあ
ることを再認識させてくれた。(『ぼやけた風景の輪郭線/2023』より)

その時々で存在感が増したり、減ったりするような移ろいのある、“不確かなもの”、もしくは、“不確かな場”が設計できないだろうか。
これは、「設計者としての私がどこまでそのPJに関わりたいと思っているか」を考えることなのかもしれないと、ある時ふと思った。
私が線を引くところと、私以外の何者かに委ねるところ。
私がコントロールできることと、私の手を離れるところ。
現時点での私にあった両者の境界線を探っているのかもしれない。

私は、本修士設計を上記を探索する試みとして位置付け、これまでに生活したことのある3つの私的な敷地で、
暮らしから得た気づきをヒントに、それぞれの「不確かさ」について考えた。

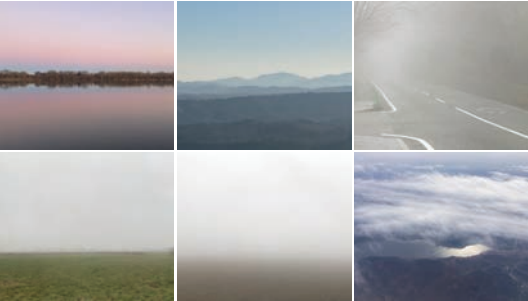
Is it possible to design something with an elusive quality, something that shifts in presence, becoming more or less noticeable depending on the moment—a kind of “uncertain thing,” or perhaps an “uncertain space”?
One day I thought that this might be about considering “how much I, as a designer, want to be involved in this project.”
It's about finding where I draw the line and where I leave it to something or someone else.
It's about the things I can control and the things that are beyond my control.
I'm exploring the boundary between the two, based on where I am at this moment.
I positioned this master's design as a thought experiment of the above,
and considered the “uncertainty” of each of the three private sites, taking hints from the realizations I have gained from my life so far.

2. 拡大したものの採集 (Habituation)



10 日程前から撮り溜めている、かなりズームした解像度の低い
写真。中でも私の端末で最大のズームにもなると、何を映して
いるのかさえ分からないものの中にはある。
そんな写真は誰かに伝える“記録のメディア”としては不向きで
あると自覚しているが、私は好きである。特段、理由をつける
ことなく、気づいたら始めていたことに、今の私が思う理由を
試しにつけてみる。
おそらく、この写真を誰かに見せた時や、後日自分で見返した
時に、錯覚してしまうことや、誤解が生まれること、1 枚の写
真に複数の解釈が共存できることに、今の私は、惹かれている
のだと思う。
視覚的な情報に加えて、頭の中の世界が広がるような感覚。
本来関係のなかったものが、頭の中の世界でつながっていく。
おそらく、“想像力”が働きやすい状態なのだと思う。
(『拡大写真/2016-2025』より)

3.“間”にあるものとしての水蒸気 (Mist)



“水蒸気”という粒子 (*Mist*) の存在によって、その背景にあるも
のに、意識がいったり、意識がなくなったりする。
遠くの山を見ているとき、自分と山との間には、常に水蒸気は
存在しているが、その時々の状態によって、山というシルエッ
ト全体にピントがあったり、木にピントがあったり、はたまた
水蒸気そのものにピントがあったりする。

- 霧で先が見えない道
- 雲の隙間から見えたり隠れたりする湖
- 対岸の木々と距離感が掴めない湖畔

これらはいずれも、「対象の見え方は、主体と対象の間にある“不
確かなもの”の状態によって、移り変わる」ということを教え
てくれた。(『水蒸気/2024-2025』より)

4. 小さな気づき (Small happiness / Outro)



映画やドラマといった時間の制約があるものには、劇的なこと
が起こったところをピックアップして作品化されることが多い。
しかし、多くの人が平凡な日常を生きていて、ほとんどの人にと
っては、そういう日常こそが、この世界の主役だと思う。
スペシャルなことばかりに意識をとられると、繰り返しの日々
の中にも、感情の揺らぎや気づきがたくさんあるのに、その些
細な差を見落としてしまう。
誰しもこういう経験はあると思う。これ見つけたの自分だけか
も！という小さな発見と大きな喜び。他の人にとっては何でも
ないものが、私にとっては特別なものになる瞬間。
こんなことを敷地にたくさん散りばめるように設計した。
不確かだからこそ生まれるイレギュラーが、毎日の“小さな気づ
き”となり、いつもの何気ない生活を、ほんの少しだけ楽し
くしてくれるのではないだろうか。私は本修士設計を通して
「思っているよりも、日常と非日常は近い距離にあるのかもしれ
ない」と思えて、ほんの少し幸せ (*Small happiness*) になった。



Tokyo University of the Arts T3rd Graduation Works Exhibitions 2025

© Kazuki Miyata



8 Windows and 4 Curtains / Tokyo, Japan

© Kazuki Miyata



11m Line / Ehime, Japan

© Kazuki Miyata



Trees point and Moving point / Pathumthani, Thailand

© Kazuki Miyata

8つの窓と4つのカーテン

東京，日本

ワンルームの小さな改修

18.1㎡

8 Windows and 4 Curtains

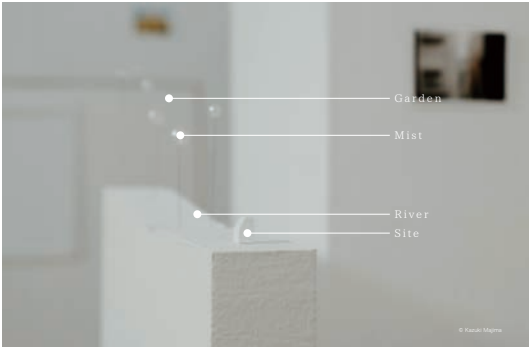
Tokyo , Japan

Renovation of 1-Room in an Apartment

18.1㎡



両側から見る。窓から入ってくる光を頼りに、試しにカーテンの位置を動かしてみる。光が少し動いたら、追いつけるようにカーテンをまた少し動かしてみる。その小さな操作が、部屋全体に影響を与え始める。(Model S=1/20)



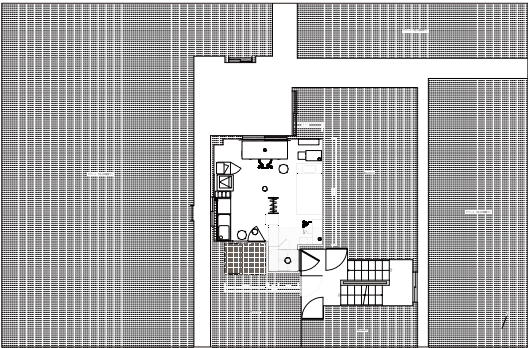
私が生活するアパートと、約170m 先にある肥後瀬川公園と、その間に流れる神田川を写した模型。上京してからの5年間、北側の窓から見た日常の風景が、いつも少し変わって見えるのは、幸運光が発生しやすいからである。(Model S=1/1500)



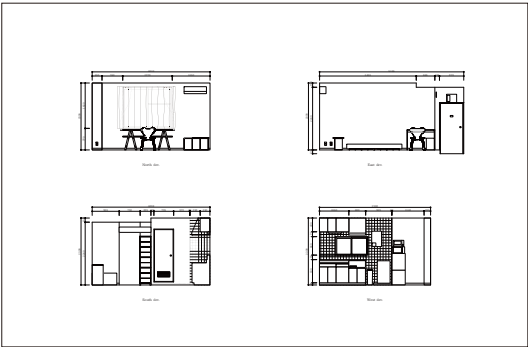
北側の窓から、肥後瀬川公園に植っている木々の影がよく見える。写真は、秋に紅葉したイチョウの木々。窓から見える面積がたえ小さかったとしても、日々のお散歩で体得した庭園の大きさのようなものが、実際には見えていない部分を補填してくれて、真ん中に庭園の大きさ以上の広がりをもたらしてくれる。

場所は、私が住み始めて5年目になる東京のアパートのワンルーム。私は、この部屋の中心に、4枚のカーテンと、8つの窓で構成する楕円状の建築を設計した。このカーテンは、1日の中で、まるでカメラの絞りのようなふるまいをする。生活する人間の行為と連動し、たとえば、ごはん時にはキッチンにピントをあわせたり、お茶をするときには飾っている絵にピントをあわせたり、一息つきたい時には170m先の庭園にピントをあわせてみる。来客があった時は、人数に応じてちょうどよいと感じるピントを探ってみる。寝る時には、全てのカーテンを閉じて、どこにもピントがあわない状態をつくってみてもよいと思う。決まった位置、決まったシルエットを持たない4枚のカーテンを、自分の感覚だけを頼りに、ほんの少しだけ動かしたり、大胆に動かしたりしてみる。このカーテンが、ワンルームの暮らしの新たな軸となる。

The location is a studio apartment in Tokyo where I've been living for five years. In the center of this room, I designed an elliptical structure composed of four curtains and eight windows. These curtains behave like the aperture of a camera throughout the day. They interact with the actions of the person living here. For example, during mealtime, the focus might shift to the kitchen; when having tea, it might focus on the artwork displayed; when I want to take a break, I might focus on the garden 170 meters away. When guests arrive, I search for the right focus depending on the number of people. When it's time to sleep, I might close all the curtains and create a state where nothing is in focus. I move the four curtains—without fixed positions or defined silhouettes—slightly or boldly, relying only on my own sense of feeling. These curtains become a new axis for life in this studio apartment.



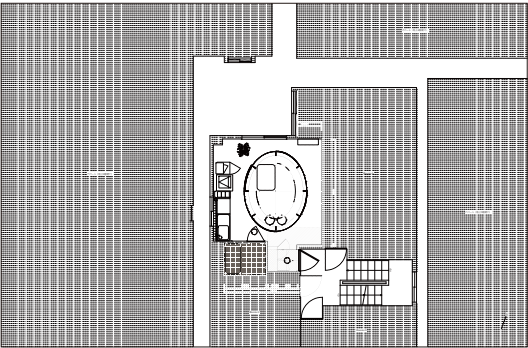
5年間の生活を通して、このようなレイアウトに落ち着いた。5年間、転々としたものもありは、ずっと動かなかったものもある。この部屋の特等席は北窓で、窓脇の先に、季節によって変化する庭園の植物が見えて、いつも観察していた。(Existing layout plan S=1/150)



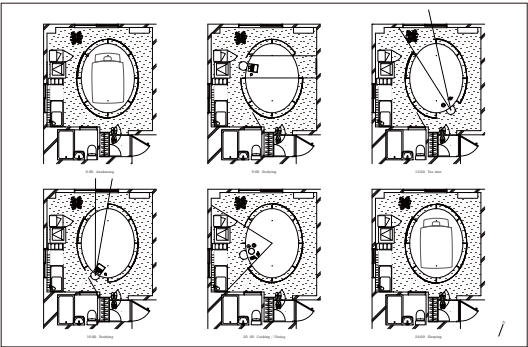
北側の窓には、窓がついておらず、外壁からセットバックしているわけでもないため、窓が閉った時はどんなに小雨でも、すぐにガラスがキャッチする。時間の経過とともに、雨で覆われていく窓と、ぼやけていく見えた風景。雨粒の大きさや、降り始めからの時間によって、見え方が変わる。窓がレースの代わりになってくれたような感覚になる。(Existing development S=1/150)



北側の窓から見える風景。アパートとアパートの隙間から見える約170m 先にある庭園と、近距離でこちらを見つめる際のアパートの窓。地方から上京した私にとって、この両者が共存する風景は、なんと東京らしいと思えた。



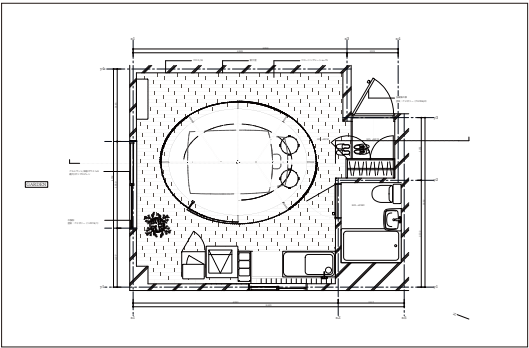
部屋の内法で測るとおよそ正方形であるが、西側の水廻りを考慮すると、人が歩けるスペースは長方形となるため、その大きさに合わせて、少し扁平させた形を与えることとした。家具と円壁に、床に固定しているわけではないため、向きを変えることもできる。(New layout plan S=1/150)



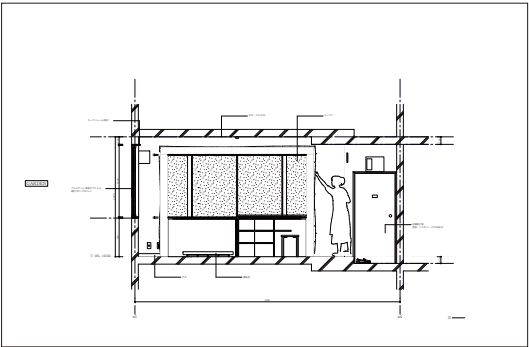
窓から入ってくる光の強さを頼りに気づいたら、ほんの数センチだけカーテンを動かしてみる。庭園の中に、その時だけの、もうひとつの庭園をつくるように。(New plan S=1/150)



向かいのアパートから見える風景。窓とカーテンの間に窓間があるものゝプライバシーなものゝであるという距離の場合、ワンルームの中にバリエーション窓間がれたことになる。(Model S=1/20)



北窓からの見え方 / 見られ方を日曜から考えていた私は、あるとき、窓が部屋に向かって膨らんだようなスケッチを書いた。その膨らみは、半円、半楕円を通り過ぎ、やがて窓から独立した線となった。その線に、4枚のカーテンを与えた。既存のレースを離れたカーテンは、部屋の中心で安しげに漂っている。(New plan S=1/70)



既存の窓枠の厚みと同じ20mmの窓枠で構築していくと、柱間が窓に見える。デーパーのついた8つの窓が、部屋を見つめている。(New section S=1/70)



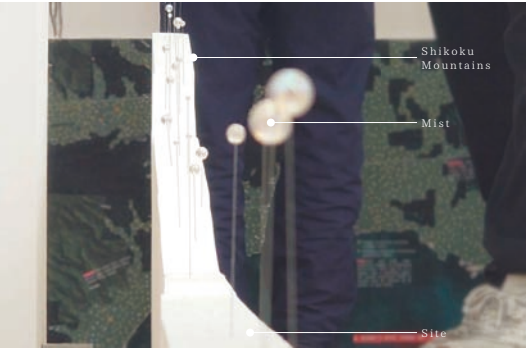
賃貸物件というだけで、設計に対する制約はとて多く、スクルトンである外壁や界壁に安着に手を加えることはできない。ただ、5年間の生活を経て、この部屋にふさわしい、新たな輪郭線がもしもあらうら、たとえばこんな輪郭線はどうだろう。(Model S=1/20)

11m の線
愛媛，日本
和室 2 部屋の改修
29.2㎡

11m Line
Ehime , Japan
Renovation of 2 Washitsu
29.2㎡



敷地南側から見る。壁と床と一部の瓦屋根を減築する。木の梁構造は全て既存である。(Model S=1/30)



祖母が生活する家と、そこから約7mm 先に見える田園山景と、その間にある水源（川・田畑など）を寓した模型。山の見え方がいつも変化するのとは、敷地南側の視界があまり進んでおらず、田園が多く残っているためである。(Model S=1/1500)



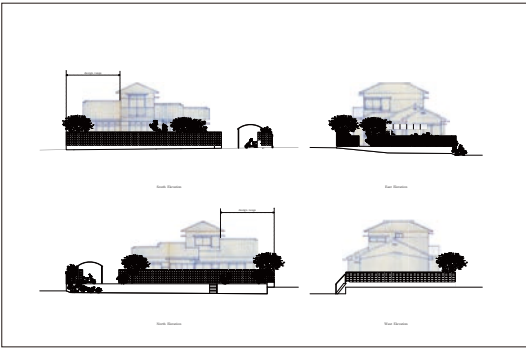
2 階のベランダから見える風景。敷地南側には、田園山地の山並みが水平に広がる。その時々、空気中の水分量によって、見え方、距離感などが変化する。

場所は、愛媛にある、築 50 年の祖母の家。
25 年前の区画整理によって南側の庭が失われ、敷地境界線が母屋に接近してきたことで、同時期に高さ約 2m のブロック塀が設えられた。
私は、使われなくなった西側の和室 2 部屋を部分的に減築し、失われた南側の庭と同じくらいの大きさで、異なる性質の半外部空間を獲得することを目指した。
小さな操作を重ねたが、その中での最も大きな操作として、既存の床下換気口 3 つを貫通する、幅 450mm、厚み 150mm、長さ 11m、のコンクリートの塊を挿入した。
祖母と塀の間に静かに現れた、一本の線上には、季節 / 時間 / 天気により、幅 / リズム / 濃淡が異なる光と影がプロットされ、その時々で 11m のゾーニングが移ろう。
寒い時は光にピントをあわせて暖をとり、暑い時は影にピントをあわせて涼をとる。
1 人の時にちょうどいい光の幅、2 人の時にちょうどいい影の幅。
想定し得るどのシーンにも寄り添わない寸法で設計された一本の線は、違和感とともにただ静かに何かを待っている。

The site is a 50-year-old grandmother's house in Ehime, Japan.
The garden on the south side of the house was lost due to land readjustment 25 years ago, and a 2-meter-high block wall was built around the same time as the property boundary line came closer to the main house.
I partially reduced the size of two disused Japanese-style rooms on the west side of the house and aimed to obtain an exterior space of a different nature, but of the same size as the lost garden on the south side.
A series of small operations, the most significant of which was the insertion of a concrete mass 450 mm wide, 150 mm thick, and 11 m long, which penetrated three existing underfloor ventilation openings.
On a single line, silently appearing between the grandmother and the wall, light and shadow are plotted in different widths/rhythms/shades depending on the season/time/weather, shifting the zoning of the 11m at different times.
When it is cold, focus on the light to keep warm; when it is hot, focus on the shadows to keep cool; just the right width of light for one person, just the right width of shadow for two people.
A single line, designed with dimensions that do not accommodate any conceivable scene, quietly waits for something with a sense of discomfort.



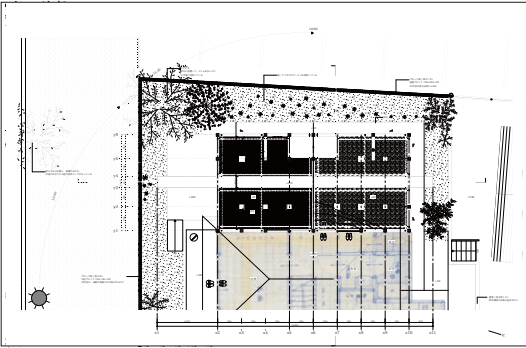
このプロジェクトの始まりは、「かつて南側のブロック塀を無くして、大きな庭が広がっていた」ということを祖母と母から聞いたことだった。その庭を無くすまで、なんとも思っていなかったブロック塀が、不純物に見えてしまうようになった。(Existing layout plan S=1/450)



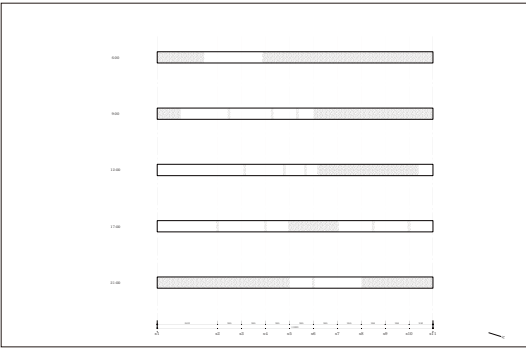
設計当初は、ブロック塀に高接手を加えてどうにかしようとしたが、最もニュートラルな既存の状態に、何か一つでも操作を加えると、そこには意味が生じてしまい、否意性が強いと感じた。(Existing development S=1/450)



敷地南側から見た母屋。かつて南庭があった場所は、現在は幹線道路が通っており、ブロック塀が敷地境界線を明示している。これは、祖母の家に隣った故ではなく、この辺り一帯の共通項である。



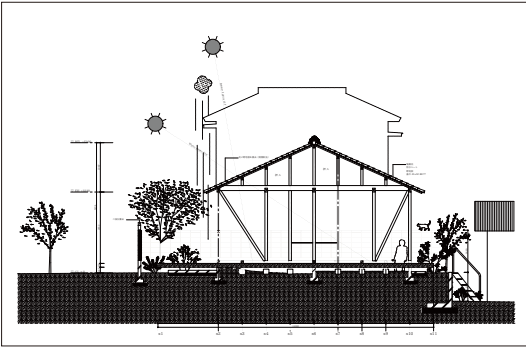
使われなくなった西側の和室 2 部屋を減築し、ブロック塀から建梁をオフセットさせることで距離を取り、その間に新たな半外部空間を設えることとした。これまで隠れていたものが、記号として露出し、そこに新たな意味を与えていく。(New plan S=1/150)



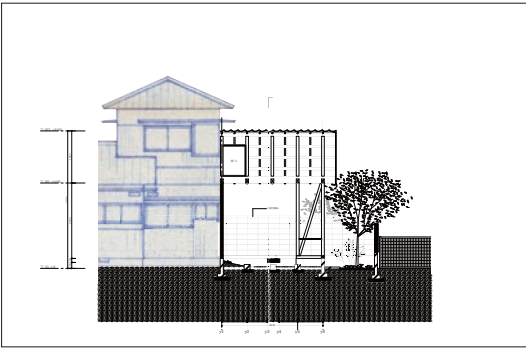
座っていると、木漏れが動いていることに気づく瞬間が現れる。影と一瞬に動きなくなるかもしれない。その場で次の影を待っているのかもしれない。(New plan S=1/150)



廊下からかつての和室を見る。両側の見えない 1 本の線が、確かな存在感と、不確かな寸法で、足元に見える。(Model S=1/30)



ブロック塀の存在は受け入れつつ、あえて同じ素材であるセメントで、この場所に新たな形を与えていく。床下換気口の三点で支持された 11m のコンクリートの塊は、その時々で、何に見えるだろうか。(New long section S=1/150)



最初の主題であったブロック塀には、最終的にはとんだ手を触れることなく、気づいたら消滅となっていた。でも、おそらく最初の見え方とはまだ違う見え方をしていると思う。(New short section S=1/150)



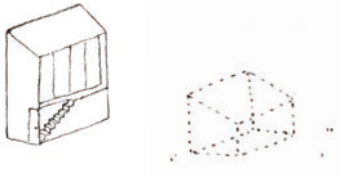
50 年間、雨に当たっていなかった既存の土（GL+60mm）を露出し、基礎内で GL の高低差をつくることで、コンクリート壁との距離感をその時々シーンに応じて変えるようにする。(Model S=1/300)

定点と動点
パトゥムタニ，タイ
塔と、窓としての浮小屋
22.7㎡

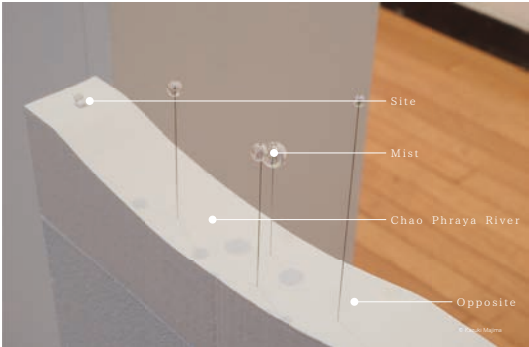
Fixed point and Moving point
Pathumthani , Thailand
Tower and Hut as Window
22.7㎡ (=RC:9.0㎡+W:13.7㎡)

場所は、タイにいる知人が暮らす、チャオプラヤ川のほとり。
1 年を通して、水位の変動が最大で 7m あり、雨季になると水没し、乾季になると姿を現す、という敷地の存在自体が不確かな場所である。
私は、この場所に、水位とともに、断面計画が常に少しずつ変化する、定点としての RC 造の塔と、動点としての木造の浮小屋を設計した。
浸水想定ラインよりも高いところに床を持つ塔には、寝室と書斎を配し、浮小屋は小舟で工芸品を売る商人のためのワークスペースとした。
塔からの眺めは、浮小屋がどのレベルに位置するかで常に変化する。
雨季の時には、対岸の小屋や森にまで水平に視線が抜けるが、中間期にはアイレベルに屋根が重なり、近くの水面、もしくは、遠くの空に視線が向かう。
また、乾季には浮小屋が地面に接地し、塔からの眺めは最も広範囲に及ぶ。
窓としての浮小屋が新たな生活の軸となる。

The location is by the Chao Phraya River in Thailand, where my friend lives.
The water level fluctuates by as much as 7 meters throughout the year, and during the rainy season, the area gets submerged, only to reappear in the dry season—making the very existence of the land uncertain.
For this place, I designed a reinforced concrete tower as a fixed point, where the cross-sectional layout changes gradually with the water level, and a floating wooden hut as a moving point.
The tower, with its floor above the flood line, contains a bedroom and a study, while the floating hut serves as a workspace for merchants who sell crafts from small boats.
The view from the tower changes constantly depending on the level of the floating hut. During the rainy season, the view stretches horizontally across to the huts and forest on the opposite shore.
In the transitional period, the roofs overlap at eye level, and the gaze shifts either to the nearby water surface or to the distant sky.
In the dry season, the floating hut settles on the ground, and the view from the tower becomes the broadest, spanning far and wide.
The floating hut, as a kind of window, becomes the new axis of life.



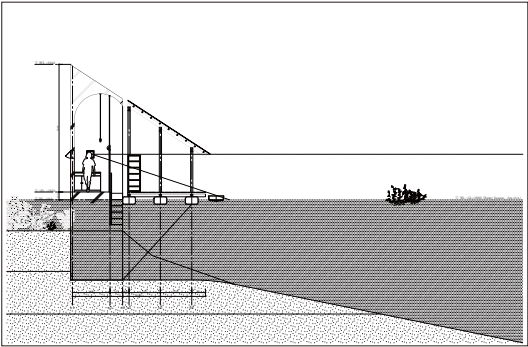
南側から見る。塔と浮小屋の位置関係によって、塔内部に差し込む光の量と線様が変化する。上から差し込む光がある年の雨季ではゼロになるかもしれないが、ゼロにならない年もあるだろう。その変化に気づいた時、塔の中では、敷地を超えて、チャオプラヤ川、はたまた地球にまで思いが延ぶ。なぜ、今年は光がずっとあったのだらうかと。(Model S=1/30)



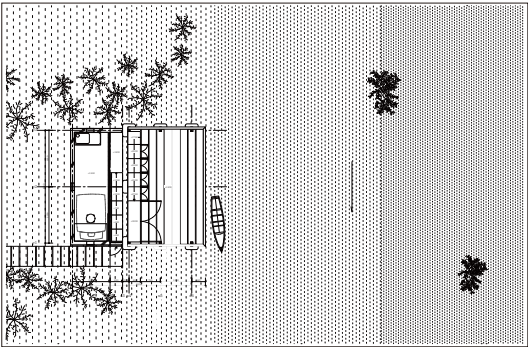
知人が生活する小屋と、約 250m 先にある対岸の岸と、その間にあるチャオプラヤ川を現した模型。一年を通して水深が 7m 変化するチャオプラヤ川や、雨季のヌコールが対岸との関係性に重なりをもたす。(Model S=1/1500)



塔から、浮小屋を介して、先を見る。写真は、中間期(雨季)のイメージ。浮小屋の屋根が、アイレベルと重なり、水平線は見えない。見えるのは、小舟と浮草と水面の揺らぎ。水位によって高さが変化する浮小屋が、テーブル窓のように振る舞う。(Model S=1/30)



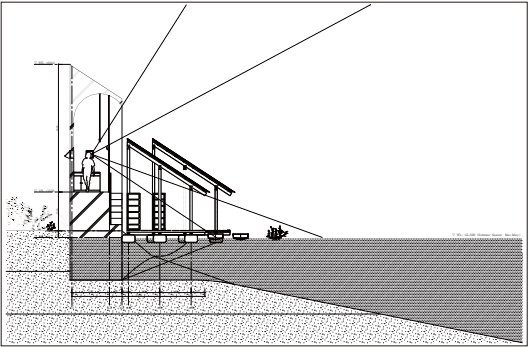
雨季の中でも、道路が冠水する 10 月頃を想定した断面図。水位が上昇するにつれて、塔と浮小屋の断面が 2 つで 1 つの形となり、次第に塔からの視線が水平に伸びるようになる。対岸の小屋の形姿みや森が見える。(Section -Rainy season- S=1/150)



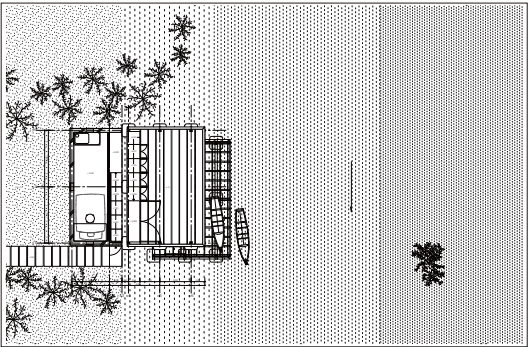
敷地が水で覆われて、どこまで敷地で、どこから敷地外なのかわからなくなる季節。一年間通でこのリセットがあるとき、この川はどこまでも敷地の一部だと覚えるかもしれない。(Plan -Rainy season- S=1/150)



敷地奥側に見える風景。写真は雨季の始まり(8 月)に撮影したもの。ここから少しずつ、対岸に建つ高床式の小屋の足(脚)が短くなっていく。



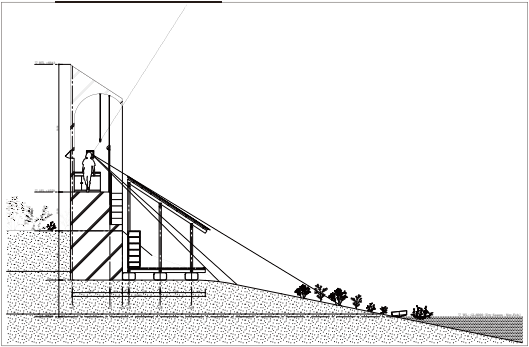
年間でも最も気温が高くなる夏季。アンカーロープに遊びが生じるため、浮小屋は垂直方向だけでなく、水平方向にも揺らいている。(Section -Summer season- S=1/150)



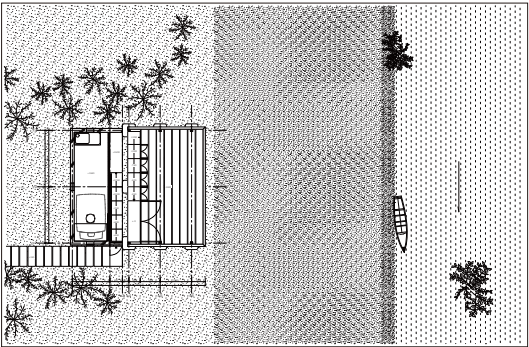
少しずつ川が広がってあたり、覆れていたりする季節。川と陸の境界線が自分の真下にある。(Plan -Summer season- S=1/150)



浮草が、左から右にともちゅりて流れている。また、アイレベルの高さによって入射角が変わり、水面の表情が変わる。



乾季になると水位は下がり、次第に浮小屋は地面に接地する。一年を通して、最も気温が低くなるこの季節に、最も光が入ってくる。(Section -Dry season- S=1/150)



浮が基盤となり、会々が定点となる。動かない場所から、動いている川を見つめている。(Plan -Dry season- S=1/150)



乾季になるにしたがって、水が引いていき、次第に土が見える。「川」が、敷地というアドレスから、見る対象へと変化する。